

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Confusion a case-marking particle by learner :  
between existence place "ni" and range and  
attributive "de"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 美穂, 林田, 実, OKADA, Miho, HAYASHIDA, Minoru メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001864">https://doi.org/10.15084/00001864</a>

## 研究論文

日本語学習者による格助詞の混同  
— 存在場所の「に」と範囲限定の「で」 —Confusion a case-marking particle by learner  
— between existence place “ni” and range and attributive “de” —

岡田 美穂・林田 実

OKADA, Miho・HAYASHIDA, Minoru

## 要旨

日本語学習者は、存在場所を表す格助詞「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いることがある（例：大学の中で友達がいます）。本研究では、存在場所を表す「に」の習得の様子を探るため、日本語学習者を対象とした穴埋めテスト形式の調査を行った。その結果、上の誤りは日本語レベルが「中級の下」の学習者に最も多く見られ、存在場所を表す「に」の習得は「U字型発達」を示していた。また、上の誤りは、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同により生じていると考えられる。

キーワード：格助詞の誤用 存在場所「に」 範囲限定「で」 存在動詞「いる（ある）」

## 1. はじめに

場所を表す格助詞「に」と「で」は日本語学習者にとって誤りやすい格助詞である。人や物の存在する場所を表す格助詞「に」（以下「存在場所『に』」）を誤って「で」を用いる学習者がいる。逆に、「で」を用いるべきところに誤って「に」を用いる学習者もいる。日本語学習者の格助詞習得に関する研究には、福間（1996）、迫田（2001）、頼（2002）、森山（2002）、蓮池（2004）等がある。初級学習者の作文を観察した福間（1996）では、存在場所「に」の誤用が多く見られ、その場合、動作・行為の場所を表す「で」（以下「動作場所『で』」）との混同が多かったと報告している。また、迫田（2001）、頼（2002）、蓮池（2004）等では、「に」と「で」の選択に迷った場合に、学習者は次のようなストラテジーを用いることが主張されている。

- ・「地名・建物を示す名詞＋で」というユニットの形成と、「位置を示す名詞（例：中・前）＋に」というユニットの形成のストラテジー（迫田，2001）。
- ・存在動詞「いる（ある）」を目当てに「に」を選ぶというストラテジー（頼，2002；蓮池，2004等）。

だが、学習者が単純にこれらのストラテジーを用いているならば、次のような誤りは表れないと思われる（誤りの部分に下線を施す）。

### 学習者1 (中級 中国語話者)

- 例 (1) 寮に友達がいません。大学で友達がいます。(タイトル「〇〇さんってこんな人」2002年4月に書かれた作文)
- 例 (2) 日本で勉強している。(同上)

### 学習者2 (中級 中国語話者)

- 例 (3) 大学の中で友達がいます。(タイトル「〇〇さんってこんな人」2002年4月に書かれた作文)
- 例 (4) 道にいる。(タイトル「ねぶた」2002年5月に書かれた作文)
- 例 (5) 青森市で行われている。(タイトル「ねぶた」2002年5月に書かれた作文)

例 (1), 例 (2) は, 学習者1が同じ作文の中で書いた文である。また, 例 (3), 例 (4), 例 (5) は, 学習者2が同じ時期に書いた文で, 例 (4), 例 (5) は, 同じ作文の中で書いた文である。

例 (1) の「寮に友達がいません」と「大学で友達がいます (誤用)」は, ともに存在動詞「いる」を含む文だが, 第1文では正しく存在場所「に」を用い, 第2文では誤って「で」を用いている。また, 例 (3) 「大学の中で友達がいます (誤用)」, 例 (4) 「道にいる」も, ともに「いる」を含む文だが, 例 (3) では誤って「で」を用い, 例 (4) では正しく存在場所「に」を用いている。

これらの例はどちらも動詞が「いる」なので, 単純に「いる」を目当てに「に」を選んでいるとは考えにくい。また, 格助詞の前の名詞も「寮」「大学」という場所名詞なので, 名詞を判断の基準として格助詞を選んでいるとも考えにくい。さらに, 例 (2) 「日本で勉強している」(学習者1), 例 (5) 「青森市で行われている」(学習者2) のように, 動作場所「で」が正しく用いられている文もあることから, 学習者1, 学習者2ともに, 「動作場所には『で』を用いる」ということは一応習得していると推測される。

このように存在場所「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いるのは, 存在場所「に」と動作場所「で」とを混同しているわけではないことを示唆しているのではないだろうか。では, 存在場所「に」と混同されているのは, どのような「で」なのであろうか。以下, 第2節では, 仮説を立て, 第3節では仮説に基づいた調査の内容について, 第4節では調査の結果について述べる。第5節は, まとめと今後の課題について述べる。

## 2. 仮説

まず, 存在場所「に」と混同されているのは, どのような用法の「で」なのかについて考える。

森山 (2004) は, 「で」の用法を次のように分類している。

- 1 <道具> : 道具, 手段, 材料, 媒体, 構成要素
- 2 <原因> : 原因, 理由, 根拠, 動機
- 3 <場所> : 場所, 場 (抽象的場所, 場面)
- 4 <様態> : 動作主, 対象の様態, 作用, できごとの状態
- 5 <限定> : 範囲, 数量限定, 期間, 時限定
- 6 <時間> : 時間
- 7 <動作主> : 動作主, 動作集団

このうち、場所名詞とともに用いられるのは、「場所名詞+で」が3<場所>を表す場合(動作場所「で」、例: 食堂で食べます)と、「場所名詞+で」が5<限定>を表す場合(以下「範囲限定『で』」、例: 韓国で有名な人は誰ですか)である。存在場所「に」を用いるべきところで誤って「で」を用いるのは、前節で述べたように、存在場所「に」と動作場所「で」の混同によるものでないとする、次の可能性は範囲限定「で」ということになる。

学習者の作文を見ると、存在場所「に」を用いるべきところに「で」が用いられる誤りには特徴がある。まず、例(1)では、「寮」と「大学」という2つの場所が対比されている。また、例(3)では、格助詞の直前に「中」という位置を表す名詞がある。学習者の作文を見ると、これ以外にも、文中に数詞、疑問詞、人の集合体を表す名詞(たとえば「寮にアメリカの人がいます」は個人も集合も指しうる)がある場合も、存在場所「に」を用いるべきところに「で」が用いられるという下のような誤りが見られた(誤りの部分には下線を施す)。

- ・人の集合体を表す名詞、位置を表す名詞「中」がある場合  
ほかの韓国人の中でいた。(韓国語話者)
- ・数詞がある場合  
2階でいる。(中国語話者)
- ・数詞、位置を表す名詞「中」がある場合  
私の家の中で二つテレビがあった。(イタリア語話者)
- ・疑問詞がある場合  
寮で何人いますか。(中国語話者)

ここから、次のような仮説を立てた。

〔仮説Ⅰ〕 次の2つの場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤りが見られる。

- ① 2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合。
- ② 文中に位置を表す名詞、数詞、疑問詞、人の集合体を表す名詞がある場合。

〔仮説Ⅱ〕 存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤りは、存在場所「に」と範囲限定「で」とを混同したものである。

ところで、森山（2002）は格助詞の誤りの原因として、次の4つをあげている。

- 1 母語の負の転移によるもの。
- 2 意味役割のカテゴリー分化が不十分なために起こるもの。
- 3 「名詞+助詞」のユニット形成が誤りを引き起こしたものの。
- 4 機能語の脱落が起こったもの。

森山（2002）では、「学校に帰る」「家に出る」「家へ出る」「大学へ遊ぶ」という誤りを、「2 意味役割のカテゴリー分化が不十分なために起こるもの」と「3 『名詞+助詞』のユニット形成が誤りを引き起こしたものの」のどちらの可能性もあるとしている。この調査に用いられた動詞は、「帰る」「住む」等49種類である。存在動詞「いる（ある）」は含まれていないが、先の誤りの例（1）、例（3）も、「2 意味役割のカテゴリー分化が不十分なために起こるもの」、「3 『名詞+助詞』のユニット形成が誤りを引き起こしたものの」のどちらの可能性もあるだろう。だが、本研究では「2 意味役割のカテゴリー分化が不十分」の例と考える。つまり、存在場所「に」と範囲限定「で」は、「存在場所」と「範囲」が学習者にとって類似の概念であるために、上の①や②のような場合には混同が起きやすくなるという見方である。①や②の場合に混同が起きやすくなる理由は現時点ではよくわからないが、本研究では、議論の第一段階として、上記の〔仮説Ⅰ〕、〔仮説Ⅱ〕が成立するかどうか、すなわち「存在場所『に』の習得と範囲限定『で』の習得との間に相関関係が見られるかどうか」に焦点をあてて考察し、次のことを明らかにする。

- 1 存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤りが見られるのは、次の2つの場合である。(i) 存在動詞「いる（ある）」を用いた文で2つの場所が対比させる形で用いられている場合。(ii) 文中に数詞、位置を示す名詞、疑問詞、人の集合体を表す名詞がある場合。
- 2 上記の誤りは、存在場所「に」と、範囲限定「で」（例：韓国で有名な人は誰ですか）とを混同したものである。

### 3. 調査

先に示した仮説を検証し、存在場所「に」の習得の様子を探るために、本研究では、日本語レベルが「初級」から「中級の上」の学習者を対象に、「に、で、を、から」の四択穴埋めテスト形式の調査を行った。穴埋めテストを採用したのは、インタビューや作文といった方法では、調査項目が学習者にとって苦手な表現である場合に、使用が回避される可能性がある（ロッド・エリス、1988）からである。また、「を」「から」を加えたのは、「に」「で」の二者択一によるまぐれあたりをできるだけ排除するためである。

#### 3.1 調査用紙作成の際の留意点

本調査では、動詞「いる（ある）」が存在を表すものについてだけを問題にしている。「会議がある」等の「ある」は対象外としている。また、動作動詞には「食べる」を使った。場所を表す名詞も1つに限定するべきだったが、自然な問題文を作るために、「中国、韓国、日本、食堂、寮、大学、東京」を使った。なお位置を表す名詞については、「中、前、外」を使って問題文を作ることとなった。

調査用紙は以下のような6種類の文からなり、統計処理上、全体で42問の穴埋め問題とした。以下、すべての問題文を示す。問題文の番号は調査用紙の番号の順とは一致しない。なお、調査用紙に用いる語は、学習者が既に学習済み、あるいは既に知っている語であることを確認している。

[問(1)「存在場所」単純文の「に」、「で」:6問]

存在場所「に」と動作場所「で」を選ぶ問題である。「に」をとる存在動詞「いる（ある）」文3問、動作動詞「食べる」を含んだ文3問である。後者には、補助動詞「いる」を用いた文も含めた。これは、「いる」という形式にひかれて「に」が誤って選ばれるということがあるので、誤りが出やすくなるようにしたためである。「単純文」という名称を用いたのは、後に述べる問(3)、問(4)と区別するためである。

- 1) 食堂（に）彼がいます。
- 2) 中国（に）おばさんがいません。
- 3) 東京（に）大きな病院があります。
- 4) 食堂（で）ご飯を食べます。
- 5) 食堂（で）ご飯を食べています。
- 6) リーさんはいつも寮（で）ご飯を食べています。

[問 (2) 「範囲限定」文の「で」: 7 問]

「範囲限定」「で」を正答とする問題である。

- 7) 韓国 (で) 有名な人は誰ですか。
- 8) 中国 (で) 有名なところはどこですか。
- 9) 大学の中 (で) だれが一番テニスが上手ですか。
- 10) 東京 (で) どこが一番好きですか。
- 11) あの店の中 (で) 何がほしいですか。
- 12) 大学の留学生の中 (で) イさんが一番背が高いです。
- 13) 日本の食べ物の中 (で) おいしいのはラーメンです。

[問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文の「に」: 7 問]

存在場所「に」を正答とする問題である。本問には場所の対比が含まれており、その点に問 (1) との違いがある。2つの存在文が、人または物が存在する2つの場所を対比させる形で用いられている問題文である。

- 14) 寮の中 (に) みんないます。寮の外 (に) リーさんがいます。
- 15) 韓国 (に) 父がいます。日本 (に) 母と兄と妹がいます。
- 16) 日本 (に) ボーリング場があります。中国 (に) ボーリング場はあまりありません。
- 17) 食堂の前 (に) イさんがいます。食堂の中 (に) 誰もいません。
- 18) 家の中 (に) ネコはいません。あそこ (に) います。
- 19) 家 (に) お金がありません。銀行 (に) お金が 50 万円あります。
- 20) 教室 (に) テレビが 1 台しかありません。あそこ (に) 3 台あります。

[問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文の「に」: 8 問]

存在場所「に」を正答とする問題である。本問は数詞、位置を表す名詞、疑問詞、人の集合体を表す名詞のいずれかを含み、その点で問 (1) と異なる。また、問 (2) との違いは範囲を限定する文ではないこと、問 (3) との違いは場所の対比がないことである。

- 21) この寮 (に) 入口が三つありますか。(数詞)
- 22) きのう、みんなは日本料理を食べました。私もその中 (に) いました。  
(位置を表す名詞)
- 23) 大きな病院は東京 (に) いくつありますか。(疑問詞)
- 24) 寮 (に) アメリカの人がいますか。(人の集合体を表す名詞)
- 25) 銀行 (に) お金が 100 万円あります。(数詞)

- 26) 寮（に）5人メキシコの人があります。（数詞，人の集合体を表す名詞）  
27) 中国の人は大学（に）何人いますか。（疑問詞，人の集合体を表す名詞）  
28) いろいろな料理がありました。その中（に）中国料理もありました。

（位置を表す名詞）

[問 (5) ダミー文の「を」: 7問]

- 29) 京都のホテル（を）予約します。  
30) あした朝早く，家（を）出なければなりません。  
31) 電車（を）降りてから，歩いて行きました。  
32) 帰るとき，公園（を）通りました。  
33) 小さな橋（を）渡りました。  
34) 私は大きな家（を）買いたいです。  
35) 飛行機が空（を）飛んで行きました。

[問 (6) ダミー文の「から」: 7問]

- 36) 大学（から）図書館まで自転車でいきます。  
37)きのう，大学（から）電話がありました。  
38) 家（から）歩いて10分かかります。  
39) どろぼうが家の2階（から）入りました。  
40) 勉強しているとき，窓（から）飛行機が見えました。  
41) ベッド（から）落ちたので，体が痛いです。  
42) 大学（から）図書館まで自転車でいきます。

### 3. 2 調査対象者

調査の対象者は，2004年度と2005年度に九州女子大学別科日本語研修課程で日本語を学習した外国人留学生61人<sup>1</sup>である。61人を以下のような4つのレベル<sup>2</sup>に分けた。

- ・初級（17人）日本語能力試験3級に合格している学習者と，日本語能力試験3級の過去問題をした結果，日本語能力試験3級に合格するとみなされた学習者である。
- ・中級の下（17人）日本語能力試験2級受験準備中の学習者である。それは，日本語能力試験2，3級の過去問題をした結果，日本語能力試験3級には合格するが，日本語能力試験2級には2割前後点数不足で不合格となる学習者である。
- ・中級の中（20人）日本語能力試験2級に合格している学習者と，日本語能力試験2



級の過去問題をした結果、日本語能力試験2級に合格するとみなされた学習者である。

- ・中級の上(7人) 日本語能力試験1級に合格している学習者と、日本語能力試験1級の過去問題をした結果、日本語能力試験1級に合格するとみなされた学習者である。

日本語レベルが「初級」の学習者は初級用テキスト(『みんなの日本語初級I・II本冊』スリーエーネットワーク)の学習を終えており、日本語レベルが「中級の下・中・上」の学習者は、初級用テキストを終えた後、中級用テキストを使って学習している。

#### 4. 結果と考察

##### 4.1 存在場所「に」の習得の様子

表1は、学習者の日本語レベルと、それぞれの間を正しく回答した場合の正答率(各問題文の正答の合計÷(調査対象者数×問題数):表1の括弧内)の関係を見たものである。

まず、問(2)「範囲限定」文では、日本語レベルが上がるとともに、問(2)を正しく回答した場合の正答率(範囲限定「で」)も直線的に上がっている。だが、問(3)「いる(ある)+場所対比」文と、問(4)「いる(ある)+数詞等」文では、「初級」から「中級の下」にかけて問(3)、問(4)を正しく回答した場合の正答率(存在場所「に」)がいったん下がり(問(3):65.5→45.4, 問(4):72.1→55.1),その後再び上がるという「U字型発達」の現象が現れている。

[表1:日本語レベルと問(2), 問(3), 問(4)を正しく回答した場合の正答率との関係]

	日本語レベル			
	初級	中級の下	中級の中	中級の上
問(2)「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	63.9 (76/119)	66.4 (79/119)	81.4 (97/119)	81.6 (40/49)
問(3)「いる(ある)+場所対比」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	65.5 (78/119)	45.4 (54/119)	72.9 (86/119)	87.8 (43/49)
問(4)「いる(ある)+数詞等」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	72.1 (98/136)	55.1 (75/136)	73.8 (100/136)	89.3 (50/56)

ただし、日本語レベルが同じであっても、学習者によって正答率にかなりのばらつきがあるので、それぞれの間の正答率の違いに有意差があるかどうかを見るために、t検定を行った。その結果が表2と表3である。表2、表3では「いったん下がって再び上がる」というU字型の発達をより明確にするために、日本語レベルを「初級」「中級の下」「中級の中・上」の3段階に分けている。

表2、表3に見られるように、日本語レベル「初級」と「中級の下」の間、および日本語レベル「中級の下」と「中級の中・上」の間で、問(3)問(4)を正しく回答した場合の正答率に差があることは、1つを除いて、5%の有意水準で支持される。また、残りの1

つについても、p 値は 0.062 であり、かなり有意に近い。以上のことから、存在場所「に」を正答とする問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文、および問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文を正しく回答した場合の正答率は、いったん下がり、その後再び上がるという U 字型発達を示していることがわかった。存在場所「に」(問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文、および問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文) の習得が U 字型を示したことは、おそらく、存在場所「に」、範囲限定「で」は初級段階から知っているが、日本語の学習が進み、さまざまな格助詞の用法を知っていくと、格助詞同士の混同が起こり、誤りを引き起こすからだろう。

[表 2 : 日本語レベル「初級」と「中級の下」で問 (3)、問 (4) を正しく回答した場合の正答率の差の検定]

	日本語レベル	標本数 (学習者数)	全体の正答率 (正答率平均)	t 値	p 値
問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	初級	17	65.5	1.94	0.062
	中級の下	17	45.4		
問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	初級	17	72.1	2.06	0.047*
	中級の下	17	55.1		

\* 5%の有意水準

[表 3 : 日本語レベル「中級の下」と「中級の中・上」で問 (3)、問 (4) を正しく回答した場合の正答率の差の検定]

	日本語レベル	標本数 (学習者数)	全体の正答率 (正答率平均)	t 値	p 値
問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文を正しく回答した場合の「に」正答率	中級の下	17	45.4	-3.42	0.001**
	中級の中・上	27	76.7		
問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文を正しく回答した場合の「に」正答率	中級の下	17	55.1	-3.05	0.005**
	中級の中・上	27	77.8		

\*\* 1%の有意水準

#### 4. 2 仮説の検証

前節で述べたように、問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文と、問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文を正しく回答した場合の正答率 (存在場所「に」) は、日本語レベル「中級の下」ではいったん下がり、その後再び上がっていた。このことは範囲限定「で」の習得と関係があると考えられる。実際、日本語レベル「中級の下」では、問 (3) と問 (4) を正しく回答した場合の正答率は下がっているが、問 (2) を正しく回答した場合の正答率は逆に上がっている。

問 (1) ~ 問 (4) を正しく回答した場合の正答率の相関係数を、表 4 (日本語レベル「初級」「中級の下」) と表 5 (日本語レベル「中級の中・上」) にまとめた。表 4、表 5 を見ると、問 (1) を正しく回答した場合の正答率 (存在場所「に」、動作場所「で」) と問

(3) (4) を正しく回答した場合の正答率（存在場所「に」）の相関係数は、日本語レベル「初級」「中級の下」ではそれぞれ 0.554, 0.466, 日本語レベル「中級の中」「中級の上」では 0.413, 0.241 となっている。「中級の上」で 0.241 という低い相関になっている理由は不明だが（調査用紙までさかのぼったが原因は特定できなかった）、基本的には、問 (1) の正答率（存在場所「に」、動作場所「で」）が高ければ、問 (3) (4) の正答率（存在場所「に」）も高いと言える。

これに対し、問 (2) を正しく回答した場合の正答率（範囲限定「で」）と問 (3) (4) を正しく回答した場合の正答率（存在場所「に」）の相関係数は、日本語レベル「初級」「中級の下」ではそれぞれ -0.142, -0.205 なのに対し、日本語レベル「中級の中」「中級の上」ではそれぞれ 0.213, 0.400 となっている。つまり、日本語レベル「初級」「中級の下」では、問 (2) の正答率（範囲限定「で」）と問 (3) (4)（存在場所「に」）の正答率との間に負の相関が見られるということである。これは、日本語レベル「初級」「中級の下」の学習者が「場所対比」「数詞等」を含む問 (3) (4) に回答する際に、問 (2) の正答である範囲限定「で」から何らかの影響を受けたことが考えられる。

[表 4 : 問 (1) ~ 問 (4) を正しく回答した場合の正答率の相関係数（日本語レベル「初級」「中級の下」）]

	問 (1)	問 (2)	問 (3)	問 (4)
問 (1) 「存在場所」単純文の「に」、「で」を正しく回答した場合の正答率	1.000	0.156	0.554	0.466
問 (2) 「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	0.156	1.000	-0.142	-0.205
問 (3) 「いる（ある）+場所対比」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	0.554	-0.142	1.000	0.665
問 (4) 「いる（ある）+数詞等」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	0.466	-0.205	0.665	1.000

[表 5 : 問 (1) ~ 問 (4) を正しく回答した場合の正答率の相関係数（日本語レベル「中級の中・上」）]

	問 (1)	問 (2)	問 (3)	問 (4)
問 (1) 「存在場所」単純文の「に」、「で」を正しく回答した場合の正答率	1.000	0.414	0.413	0.241
問 (2) 「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	0.414	1.000	0.213	0.400
問 (3) 「いる（ある）+場所対比」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	0.413	0.213	1.000	0.517
問 (4) 「いる（ある）+数詞等」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	0.241	0.400	0.517	1.000

この見方が正しければ、「初級」「中級の下」では、問 (2) の正答率（範囲限定「で」）と、問 (3) (4)（存在場所「に」）を「で」とした誤答率（以下「『で』誤答率」）との間に相関が見られるはずである。表 6, 7 はその検定結果を示したものである。

問 (2) を正しく回答した場合の正答率 (範囲限定「で」と問 (3) を誤って回答した場合の「で」誤答率との相関係数は、日本語レベル「初級」「中級の下」「中級の中」「中級の上」で、それぞれ $-0.018$ ,  $0.250$ ,  $-0.126$ ,  $-0.536$ となっており、「中級の下」でのみ正の相関が見られる。また、問 (2) の正答率 (範囲限定「で」と問 (4) の「で」誤答率の相関は、日本語レベル「初級」「中級の下」「中級の中」「中級の上」で、それぞれ $0.399$ ,  $0.139$ ,  $-0.437$ ,  $-0.353$ となっており、「初級」と「中級の下」で正の相関が見られる。さらに、「初級」を「初級の上」(日本語能力試験3級合格:学習者数17)とし、新たに「初級の下」(日本語能力試験4級は合格するが3級は不合格:学習者数4)を加えると、問 (2) の正答率 (範囲限定「で」と問 (4) の「で」誤答率の相関は $-0.301$ ,  $0.399$ ,  $0.139$ ,  $-0.437$ ,  $-0.353$ となり、「初級(=初級の上)」では負の相関が正の相関に転じる様子が見られる。このことは、日本語レベル「初級 (=初級の上)」「中級の下」の学習者が「場所対比」「数詞等」を含む問 (3) (4) に回答する際に、問 (2) の正答である範囲限定「で」から何らかの影響を受け、存在場所「に」を選ぶべきところで、範囲限定「で」を選んでしまったことを示唆している。

[表 6 : 日本語レベル間で問 (2) を正しく回答した場合の正答率と問 (3) を誤って回答した場合の誤答率との相関係数 (r 値)]

		問 (3) 「いる (ある) + 場所対比」文の「に」	
		正答率との r 値 <sup>3</sup>	誤答率との r 値
問 (2) 「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	初級	0.018	-0.018
	中級の下	-0.274	0.250
	中級の中	0.132	-0.126
	中級の上	0.536	-0.536

[表 7 : 日本語レベル間で問 (2) を正しく回答した場合の正答率と問 (4) を誤って回答した場合の誤答率との相関係数 (r 値)]

		問 (4) 「いる (ある) + 数詞等」文の「に」	
		正答率との r 値	誤答率との r 値
問 (2) 「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	(初級の下)	(0.301)	(-0.301)
	初級 (=初級の上)	-0.412	0.399
	中級の下	0.006	0.139
	中級の中	0.433	-0.437
	中級の上	0.353	-0.353

## 5. 終わりに

本研究では、存在場所「に」の習得の様子を探るため、日本語学習者を対象とした穴埋めテスト形式の調査を行った。その結果、日本語レベル「初級」「中級の下」の学習者が「場所対比」「数詞等」を含む問 (3) (4) に回答する際に、問 (2) の正答である範囲限

定「で」から何らかの影響を受け、存在場所「に」を選ぶべきところで、範囲限定「で」を選んでしまったことが示唆された。すなわち、存在場所「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いてしまうのは、存在場所「に」と範囲限定「で」との混同により生じていることが考えられた。そして、存在場所「に」の習得は「U字型発達」を示すことがわかった。

しかし、このことは存在場所「に」の習得をU字型に発達させている要因の1つの可能性に過ぎない。他にどのような要因があるのかを調査し、それらの要因が、どのような順に見られなくなっていくのか等について探求したいと考えている。これは今後の課題である。

## 注

- 1 両年度の調査対象者に対してレベル別に同じ日本語学習用教科書および副教材を用い、同じ時間数の日本語学習を行っており、同じテストを実施している。また彼らの学習背景、日本滞在日数等の属性も似ている。これらのことから2004年度と2005年度の調査対象者の調査結果を合わせて用いることに問題はないと判断した。
- 2 「初級」、「中級の下」、「中級の中」、「中級の上」とは本研究で便宜的に日本語レベルを示すために名づけたものであり、日本語能力試験、OPI等のレベルとは一致しない。特に初級と名づけているレベルは、初級用テキストを使った学習を終えているので、正確には中級レベルだろう。
- 3 本来なら正答率の相関係数は、誤答率のそれと数値は等しくなり、+-の符号が逆になるはずである。だが、欠損数（誤った回答である「に」以外の助詞（例「の」「から」等）の数）を除いているため、数値が等しいものとそうでないものがある。

## 参考文献

- 迫田久美子（2001）「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー（1）—場所を表す「に」と「で」の場合—」『広島大学日本語教育研究』11, 17-22, 広島大学教育学部日本語教育学講座。
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（1999）『英語教育用語辞典』大修館書店。
- 寺村秀夫（1999）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版。
- 蓮池いずみ（2004）「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察—中級レベルの中級母語話者の助詞選択ストラテジー分析—」『日本語教育』122, 52-61, 日本語教育学会。
- 福間康子（1996）「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』8, 61-74, 九州大学留学生センター。
- 森山新（2002）「日本語の格助詞習得はどのようになされるか—韓国語母語話者に対する実験的研究—」『東アジア日本語教育シンポジウム集』38-52, 中国日本語教育研究会。

- 森山新 (2004) 「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』4, 66-75, 日本認知言語学会.
- 益岡隆志・田窪行則 (2002) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版.
- 頼怡玲 (2002) 「場所を表す「に」と「で」の使い分けに関する研究—台湾人日本語学習者の場合—」お茶の水女子大学修士論文.
- ロッド・エリス (1988) 『第2 言語習得の基礎』牧野高吉訳, ニューカレントインターナショナル.